

[演題 2]

都内オフィスビルで発生した不快害虫クロテンオオメンコガの生態と被害

○富岡康浩¹⁾, 谷川 力¹⁾, 那須義次²⁾

(¹⁾ イカリ消毒(株), ²⁾ 大阪府立環境農林水産総合研究所農業大学校)

The habits and damage of the nuisance pest, *Opogona sacchari* (Tineidae), which occurred in an office building in Tokyo

○Yasuhiro TOMIOKA¹⁾, Tsutomu TANIKAWA¹⁾, Yoshitsugu NASU²⁾

¹⁾ Technical Research Laboratory, IKARI Shodoku Co., Ltd

²⁾ Agriculture College, Research Institute of Environment, Agriculture and Fisheries

東京都心部のオフィスビル4階において、蛾が発生して問題となった。ビル管理者からの情報によると、2015年1月頃から発生し、毎月清掃時などに市販のエアゾール剤の噴霧などで対処していたが、その後も徐々に発生量が増え続けたため、12月にはフロア全体の蛾の防除が必要となった。安全性が高く、薬剤の残留や資材への影響が極めて少ない炭酸ガス製剤スプレードライ FT (有効成分プロフルトリン 0.6%) の空間噴霧による防除を実施した結果、蛾の発生は一時収まったが、1ヶ月後に再び見られるようになった。2016年1月に、種類の同定および発生源の調査を実施した結果、問題となった蛾は外来種の *Opogona sacchari* (ヒロズコガ科: Tineidae) であり、発生源は事務室に設置された観葉植物のドラセナ *Dracaena concinna* であることが判明した。本種は、小笠原父島の鶏舎で鶏用飼料を入れたトラップで発見され (高橋ら, 2000), その後、国内各地の観葉植物からの発生事例が報告されると同時に、和名クロテンオオメンコガが提唱された (吉松ら, 2004)。南大東島や沖縄本島ではサトウキビの重要な害虫となっている (小林ら, 2007)。本種の幼虫は生葉を加害せず、主に樹皮下の枯死した部分から生きた部分に侵入して摂食するため、目視ではその発生に気付きにくい。室内にあった2鉢のドラセナいずれからも本種の繭、蛹、虫糞などが見付き、周辺に多数の成虫の死骸も見られた。このほか本種の寄主観葉植物として知られているパキラ *Pachira glabra* も傍に置かれていたが、衰弱して樹皮がフカフカになったため11月に処分したとのことであった。本種による加害の特徴と同様な状況であることから、パキラからも発生していたものと推察された。これらの観葉植物は、都内の花卉卸し業者が沖縄の生産者から仕入れたものであった。暖房が効いているこのオフィスビルでは1月~翌年1月まで発生し続けたが、発生源のドラセナの撤去により終息した。国内では比較的新しい植栽害虫、農業害虫であるが、不快害虫としても今後注目すべき種類と思われる。大会当日は、本種の生態と形態的な特徴について写真で紹介する。